

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

日本語と中国語における名詞句の意味機能に関する 対照研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-09-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2291

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



肖海娜氏の博士論文審査結果

博士論文の要旨

この論文の分析対象は、日本語学においては「名詞修飾表現」、中国語学においては“名詞性偏正结构”に含まれる構造のうち、述詞性の修飾節を伴う名詞句(以下、「名詞句」はこの形式を指す)の意味機能、及び談話機能である。日本語と中国語は異なる言語類型に属するが、節が名詞を修飾する語順は一致しており、いずれも「修飾節+主名詞」となる。

本論文は第Ⅰ部と第Ⅱ部、及び補説によって構成される。

第Ⅰ部では、名詞句が文成分となる場合のうち、従来の研究では日本語において成立しやすく、中国語では成立しにくいとされていたタイプの名詞句が検討される。その結果、どのタイプの名詞句が中国語でも生産的で、どのタイプの名詞句がほとんど見られないのかが明らかにされる。また、それが談話機能的な要因によるものであることが主張される。

第Ⅱ部では、「良い天気!」のように、名詞句が独立文となる場合の状況が取り上げられる。本論文において「独立名詞句」と呼ばれるこの種の文も、従来の日中対照研究では日本語でより成立しやすく、中国語では日本語ほど用いられない、とされてきた。本論文では、中国語で成立しにくいとされてきたのは、実は日本語の直訳のみが分析対象とされてきたからであり、中国語では日本語とは全く異なる文脈において、異なる使用動機の下で独立名詞句が用いられ、その場合は逆に日本語に直訳できないことが明らかにされる。

補説では、中国語において等しく「状態形容詞」のカテゴリーに入れられていた、程度副詞を伴う形容詞と、形容詞の重ね型の意味機能が実際には異なることが明らかにされる。

論文審査結果

寺村(1975-1978)は、主名詞が修飾節内の述語と項関係を有するタイプを「内の関係」、持たないタイプを「外の関係」と呼んでいる。中国語学では、丁声树等(1961)、朱德熙(1982)、古川(1988)など多数の先行研究において、中国語における「外の関係」の状況について記述・分析が試みられてきた。日中個別言語の先行研究を見る限り、日本語と中国語における名詞修飾節の種類、及び性格にはそれほど大きな違いを見出すことはできない。しかしながら、対照研究では、日本語に比べて中国語における名詞修飾節の使用頻度が極めて低いことがしばしば指摘されてきた。本論文の第Ⅰ部では、日本語学の成果に依拠しながら、上記の「内の関係」(いわゆる「関係節(relative clause)」、本論文では「補足語修飾節」)を分析した上で、「外の関係」の名詞修飾節(「内容節」「相対名詞修飾節」)について、中国語の状況を詳しく観察・記述している。

第1章では、考察対象を規定した上で、第Ⅰ部の構成が説明される。続く第2章では、「補

足語修飾節」の中でも、特に中国語で成立しにくいとされてきた人称代名詞を主名詞とするタイプが観察される。この結果、中国語では情報構造による制限があるため、日本語ほどこのタイプが生産的にならないことが主張される。穏当な結論ではあるが、主述構造に還元できない場合の用例分析に述詞性の目的語をとる動詞ととらない動詞に関する考察が欠けており、その点で分析が片手落ちになってしまった。

第2章では、「内容節」が検討される。「内容節」とは、修飾節内の述語が主名詞と項関係を持たず、主名詞の内容説明になるものである。日本語の内容節が重要な情報を担うのに対し、中国語の同節は副次的な付加情報を担う場合にのみ成立すること、このため日本語よりも使用制限があることが主張される。ここでは、修飾節の省略の可否による検討が十分ではなく、残念ながら日本語との対比がそれほど鮮明になっているとは言えない。

第3章では、「相対名詞修飾節」が検討される。この結果、日本語の一特徴とされてきた同形式が、時間相対名詞、因果相対名詞については中国語でも無理なく成立し、空間相対名詞については成立しないことが明らかにされる。結論として、最も成立しやすいものから最も成立しにくいものまでの中国語の相対名詞間の関係が明示されており、有意義である。

第II部では、名詞句がそのまま独立文となる状況が検討される。第1章では、名詞一語文と質問に対する応答、及び「希求」用法が考察対象から外されること、「発見」と「感嘆」用法が主たる分析対象になることが説明され、続いて第II部の構成が説明される。

第2章では、中国語の独立名詞句が形式によって大きく二つのタイプ(「副詞+形容詞+名詞」型と「(指示詞)+形容詞+名詞」型)に分けられ、両者は評価性によって使い分けられていることが明らかにされる。また、前者のタイプに義務的に用いられる副詞の特徴、後者のタイプに付加的に用いられる指示詞の多くが近称の指示詞であること、及びその理由が分析される。特に、中国語の近称の指示詞が発話現場に存在しない対象を指す場合があるという指摘は興味深いものである。

第3章では、中国語の独立名詞句の意味機能が記述される。ここでは、前章の前者のタイプの独立名詞句のうち、副詞に“好”が用いられるものは独話的に、“多”が用いられるものは聞き手目当てで用いられることが明らかにされる。さらに、聞き手目当てで用いられるタイプの用法では、感嘆の対象が眼前に存在せず、記憶の中の対象に感嘆する場合にも頻繁に用いられることが示され、日本語と非常に異なった場面における用法の存在が明らかにされており、高く評価できる。

第4章では、独立名詞句の感嘆用法が、日本語においては基本的に独話的な表出であるのに対し、中国語においては、特定の聞き手に同情を求めたり、行動の修正を促したりするなどの効力を期待して用いられることが多いこと、さらに、中国語ではそれぞれの用法が形式的な区別を有することが鮮やかに示される。それぞれの直訳が相互の言語で不自然になる

点も興味深い指摘である。

第5章では、マイナス評価の独立名詞句が検討される(「のび太さんの嘘つき!」「无情无义的东西!」など)。この章では、まず、マイナス評価の独立名詞句が形式的に同格型と修飾型に分けられ、日中両言語に双方の形式が存在することが示された上で、多くの重要な新発見がなされている。重要な指摘の一部を挙げると、同格型について日本語では前項に人称代名詞を用いることができないが中国語では可能である点、中国語の修飾型は評価対象の有生性にこだわらない点、日本語の同形式が評価対象に対する対面的な罵倒に用いられるのに対し、中国語ではむしろ評価対象がその場にはいない場合に用いられる点、などである。

論文全体を通して、新しい言語現象やこれまで顧みられてこなかった問題提起の指摘が多く、豊富な用例と丁寧な観察で興味深い現象が発掘されている点が高く評価できる。しかしながら、それらに対する説明や分析の進め方に若干の難点が散見される。また、第I部と第II部、補説の間の関連性が弱く、全体像を見通すためのさらなる考察が求められる。

最終公開試験結果

最終公開試験は、2017年7月11日午後2時から、本学の三木記念会館で実施され、福田嘉一郎教授、任鷹教授、下地早智子(主査)の3名の本学教員と、立命館大学の中川正之教授が審査に当たった。まず学位申請者が論文要旨に関するプレゼンテーションを行い、そののちに各審査委員が総評、コメントを述べるとともに質問を行い、申請者が回答、コメントする、という形式で進められた。本論文は日本語で執筆されたため質疑応答は主として日本語で行われたが、任鷹審査委員との議論は中国語で行われた。

任鷹審査委員からは、名詞修飾の非典型的な用法に議論が集中している点、動詞そのものの性質からの分析が欠けている点、学術用語の使用方法が適切でない箇所などが指摘された。福田審査委員からは、喚体と述体と同じ根拠で文として成立するのか、日本語の中で形式的区別のない連体修飾節の意味的分類を別の言語に当てはめる際に無理が生じることはないか、などの根本的な問題点が問われた。また、古代日本語に抱合語的な特徴が見られることなど、重要な学説に関する紹介があった。中川審査委員からは、中国語の名詞修飾節の類型論的観察の出発点の在りかに関するコメントがあった。また、事実の指摘は面白いが「なぜか」という説明の部分の弱い点が数カ所指摘された。さらに、中国語の複合語の興味深い特徴や、指示詞の非指示的な用法、中国語に連体修飾が増えてきた理由などが問われ、申請者の今後の研究に資する多くの議論が交わされた。申請者はそれぞれの指摘と質問に対し、問題の残る点は率直に認めつつ、現段階で可能な限りの誠実な回答に努めた。

公開審査終了後、論文本体、及び質疑の内容に関する審議が行われ、肖海娜氏の学位申請論文が質量共に合格水準を満たしていることが、審査委員全会一致で承認された。